

日本テレビ

熱中時代



●私はね、あなたの成績も知ってます。——確かに良くないかも知れない。しかしあなたの様な人こそ、私の学校に欲しかった。物事に熱中する先生が欲しかったんです。

時代



日本テレビ編

テレビ小説

熱中時代

検印省略

☆定価はカバーに表示
してあります。

原 作 者 熱中時代脚本家グループ

編 著 者 新 樹 瞳 志

発 行 昭 和 53 年 12 月 11 日

発 行 者 岩 淵 康 郎

発 行 所 日 本 テ レ ビ 放 送 網 株 式 会 社

東京都千代田区二番町 14 番地

郵 便 番 号 1 0 2

電話東京 (03)265-2111(大代表)

振 替 東 京 0-153213 番

発 売 元 読 売 新 聞 社

印 刷 凸 版 印 刷 株 式 会 社

©1978 脚本家グループ Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取り換えいたします

0093-981180-8715

目次

1	明日に向かっておれは飛ぶ！	5
2	一難去ってまた一難？	34
3	借用証めがけてまっしぐら！	61
4	どこまでタタる、この仮病！	86
5	ハナッ柱は喧嘩でつぶせ！	112
6	先生とおやじの腹の虫は？	141
7	ああ、胃炎でフィーバー！	170
8	玉子焼パンティあったけ！	198
9	出来たらどうする、この悩み？	228

熱 中 時 代

1 明日に向かっておれは飛ぶ！

1

校門の前までともかくきたものの、北野きたの広大こうだいは、急におじけついて回れ右をしたくなった。

昨日まで映画のエキストラやら、ビルの窓拭きやら、その日ぐらしのアルバイトをしていた自分に、小学校教員という固苦しくて、責任ばかり問われそうな厄介やっかいな仕事しごとが、果してつとまるだろうか、という不安がドッと襲襲ってきたからである。

しかしたとえ時期はずれの補充採用ほじゅうさいようとはいえ、正規の教職員として待遇されるのだから、就職難の今日、こんないい話は滅多めったにあるものではなかった。

——えいっ、当ってくだけろ、たかが相手は子供じゃないか、男二十四、青春まっさかりのおれさまが、なにもビクツクことはねえ！

下っ腹に力を入れ、コンクリートの門柱に埋めこまれた『K市立若葉台わかばだい小学校』という真鍮しんちゆうの文字板をぐつとにらみつけた折も折、不意ににぎやかな声がして、五、六人の女性が校庭の方か

ら現われた。どうやらPTAの役員連中らしい。

校門をくぐりぬけてから左右に別れそうな気配をみせたが、「あなた、近いうちに新しい先生が見えるんですって、お聞きになった？」と、ひとりが得意気にホット・ニュースを提供したので、彼女達の足は、そこでぴたりととまった。

「ほんと、どんな先生がくるの」

「学校出たてらしいわ。城東大学じやうとうだいがくですって」

大学の名前が出たとたん、広大は思わず彼女達の方をチラッと盗み見た。どうやらおれのことらしいぞ、と思うと、急に気になってそっと耳をかたむけた。

「城東大学っていうと、三流大学じゃない。勉強もダメ、スポーツもダメ。ダメ人間のあつまりよ、あそこは」

「そうするとチンピラみたいな連中ばかりね。しかも途中採用じゃ、ロクな先生じゃないわ。ガツカリ！」

「でもどこか取り得があるんじゃない。たとえば頭がわるければ、顔がいいとか」
「それが顔もひどいんだって。おまけに背が低くて短足で……」

この野郎、いい加減にしろ！ あやうく堪忍袋の緒が切れかけるのをぐっと我慢した広大は、ベチャクチャしゃべりつづける彼女達に、少々思いをのこして校門をくぐった。

小学校というのはやたらとダダっ広くて、勝手がわからない。いったい来客用のスリッパとい

うものを用意してあるのかどうか、と、玄関のあたりでうろろしていると、不意に目の前にスリッパをつき出された。みると同じ年ぐらいの青年が立っている。

「こりやどうも」

広大はもらったスリッパをバンバンとうち合わせた。もうもうと埃^{ほこり}が立ちこめる。青年が顔をしかめた。

「北野さんでしょう、今度うちにきたの？」

のっけから駄洒落^{だじゃれ}をいったが、至極まじめな顔つきである。

「ぼく、小嶋田^{こしまだ}徳次^{とくじ}っていいます。三年二組を受けもってます」

「あなたが先生？」

「そう見えませんか」

そのとおり、スナックのバーテンみたいだよ、と、いいたかったが、むろんそんなことはおくびにも出さない。

「いえ、立派です、貫禄十分」

心にもないお世辞をいうと、相手は顔をくしゃくしゃにして喜んだが、すぐ、「これから校長に会うんでしょう」と、たずねてきた。むろんこの学校に就職する以上、はじめに校長に挨拶するのが順序というものだ。それにしてもおかしいことを聞く男だな、と不審に思った。

「校長のこと、知ってますか」

と、彼がまたたずねてきた。

「ハア、天城順三郎先生、えーと年齢は五十六歳、ご家族は……」

「戸籍調べじゃありませんよ。彼のへきですよ」

「へき？」

「なくて七癖ななくせっていうでしょう。わるいへきがあるんですよ。必ず自分の家へ下宿しろ、といひますよ」

小嶋田はあたりへ目をくばりながら声を落した。

「すると、アレですか、つまり……いいにくいなア、ホラ、男と男が愛撫するやつ、ホモ」

「そういう不潔な関係は要求しませんがね、新任の独身の先生には必ず下宿をしろ、というんです、男でも女でも、です」

男も女も一緒にたに下宿させて、一体なにをやらかすというんだろう。広大はなんとなくうす気味わるくなった。

「あなたも多分いわれますよ、どうしますか」

「どうしますかって、あのう、どうしたらいいんでしょう」

「むろん、断わった方がいいでしょう」

経験者らしく、小嶋田はハッキリと断言した。

「二十四時間常時監視じようじかんしされるだけだ。窮屈きうくつこの上もないことになります。いや、どうでもいいこ

とみたいですがね、きみが引受けてから、後悔したんじゃないアお気の毒だから」

「ご親切にどうも。でもご安心下さい、ぼくは友だちと下宿してますから。ねぐらはチャンとあるんです」

下宿があるときいて小嶋田は安心したようだった。もっともその下宿も、家賃を滞納してばかりいるので、追い立てをくってはいたのだが……。

2

「うちの校長はちょっと変っているからね、なにかいわれるかもしれませんが、ま、あまり気にせんように」

そう注意する教頭の安達勝也あたちかつやと一緒に、おそろおそろ校長室へ出向いた広大は、意外な光景にぶつかって目をむいた。

校長の天城が、大きな男子生徒を膝に抱きかかえて、子守歌をうたっていたからだ。

「校長先生、北野広大さんです」

教頭の声にはじめて気がついたらしく、天城は子守歌をやめた。

「あのう、なにをしてるんですか、校長は？」

思わずたずねる広大へ、あわてて教頭の安達が目くばせをする。

それを眺めやってから、天城はおもむろに抱きかかえた男子生徒へいつてきかせた。

「わかりましたね、きみはもう三年生です。窓からオシッコなどをしたりしてはいけません。どうですか、わかりましたか」

三年生ぐらいの子供は、教頭と広大に見つめられ、真っ赤になりながらうなずいた。

「こんどやったら、抱っこしたまま、学校中の廊下を歩きますよ」

これにはいたずら坊主も閉口したらしい。泣くようにあやまって、間もなく校長室から出ていった。

「重いですね、近ごろの子供は」

天城校長ははじめてあたりへ柔和な笑顔を向けた。年相応の皺と半白の髪がまず目についたが、声は以外と若い。馬鹿丁寧とさえ聞こえる独特のエロキュウシヨンのせいかもしれない。

「もうああいうスキンシップはおやめになった方がいいんじゃないやありませんか。ギックリ腰にでもなったら、それこそアブハチとらずですよ」

「お気づかいありがとうございます。なにギックリ腰などこわくはありません。それでよい子がひとり生まれるとあれば。そうではありませんか。教頭先生」

「お説ごもつとも」

教頭はかんたんに折れて出た。察するところ、天城という校長は表面きわめて女性的にみえるが、芯はなかなか頑固なところがあるようだ。

初対面の挨拶も無事にすみ、広大の受持ちが三年四組ときまったあとで、彼は天城校長から質

問をうけた。

「一つだけ聞きますがね、きみの長所とするとところはなんですか？」

広大にとってはいちばんにが手の質問だった。いままでずいぶんいろいろな会社の就職試験をうけたが、ほとんど面接で同じことを聞かれている。そのたびに彼は考えこんでしまうのだ。短所なら数えきれないぐらいあるが、長所という奴はどうも頭にうかんでこない。それで正直に長所はありません、とこたえると、相手はあきれた顔をして、早々に面接をうち切ってしまうのである。結果はきまって不採用、ということになる。

「なにを考えこんでいるんです。長所はあるでしょう、だれでもあるんですからね」

「しかし、どうもぼくには、いくらさがしてもそいつが見当らないんです」

「君、きみ！」

うしろから安達がつついた。適当に調子を合わせておけ、という合図らしい。広大はあわててうなずいた。

「ま、しいていえば、つまらないことにでも熱中する方です……これはやっぱり短所かな？」

「いや、結構。立派な長所ですよ。熱中するということはいいことです。とかくいまは三無時代といわれていますからね、無気力、無感動、無関心。青年はたえず感動し熱中しなければいけません。で、話はちがいますが、お住いの方は？」

「いま、アパートに友だちと住んでいます」

「女のお友だち？」

「とんでもありません。無精ひげをはやした貧乏劇画家です。こいつがまたものぐさなやつで」
世田谷のアパートで、売れない劇作家桑原隆三がさぞかし大きなクシヤミをしていることだろうと思うと、広大は急に笑いがこみあげてきた。

「そうですか、男性ですか。それじゃ、なにかと不自由でしょう」

それきたぞ、と、彼は警戒した。さっきの小嶋田の注意を思い出したのだ。

「それほどありません」

「そんなはずはないでしょう。男世帯というものは何かと行き届かないものです。よろしい、こうしましょう、私の家にいらっしゃい。歓迎しますよ。下北沢ですから、吉祥寺のこの学校へ通うのには至極便利です」

早くも強烈な勧誘がはじまった。その手は桑名のなんとやらだ。広大は友だちへの義理もあるし、とかなんとかいって、その場はどうやら切りぬけた。

3

その夜、生憎、友だちの桑原も外出していたので、彼はひとりで映画館へ入った。無事就職がきまった祝いをするためだ。映画館で就職祝いなどという、奇妙にきこえるかもしれないが、彼が東京へ出てきてしばらくひとりで生活していたとき、悲しいにつけ嬉しいにつけ、きまっ

映画館へ入ってそっと泣いたり、うわっと笑ったり（この場合に喜劇映画をえらんで入る）したものだ。そのくせがいまだに直らないのである。

さきイカの袋からおもむろにイカをひっぱり出してくわえ、ハンカチをあててカンビールの蓋をあける。

炭酸ガスの逃げる音は、場内の笑いに消されてきこえなかった。

——乾杯！

口の中でいって、目の高さにあげたカンビールを、ゴクリとひと口のどへ流しこんだとき、となりの席でくすんと鼻を鳴らす気配がした。

妙だな、と思って流し目をくれると、はつきりとはわからないが、若い女性が便箋びんせんのようなものを膝においたまま、声をころして泣いているではないか。

——変なおんなもいるもんだ、どうせ泣くんなら悲劇を選べばいいのに。

彼はもともと映画の方は興味はない。カンビールをやりながら、女の様子をそれとなくうかがっているうち、彼女が不意に立って出ていった。

その席の立ち方が、いかにも悲壮ひそくな感じだったので、ひとごとながら広大は心配になった。もっとも正直にいえば、心配半分好奇心半分といったところだが、彼も人一倍世話好きの方だから、だまって見すごすわけにはいかなかった。広大はいそいで『たったひとりの祝宴』を切りあげた。

ロビーへ出ると、さっきの若い女性は売店脇の赤電話にしがみついていた。彼はさりげないふ

りで売店へ行き、タバコを買い、彼女の様子をうかがった。

「いいわよ、そんなにいうなら、私、死ぬから。死んじゅうからね！」

突然、ヒステリーに叫び、電話を切った彼女は、思いつめた表情で外の暗闇へ走り出たのである。

——こりゃア大変だ、お祝いどころのさわぎじゃねえ、あの女の子を助けなけりゃア……。てつきり自殺するもの、ときめこんで、彼は電話の女性のあとを追った。

もしその女性が彼より年上の、三十に近いハイミスだったら、あるいは広大も無関心を装ったかもしれない。その女性は、北海道に残してきた自分の妹と同じくらいの年齢だったから、よい真剣になった、ともいえる。

その女性は下北沢の駅でおりると、賑やかな商店街とは反対の、小暗い住宅街を、小走りにいそいだ。駅から遠ざかるにつれて人通りは少なくなる。ふと気がつく彼女と広大ふたりきりになっていた。

女の足はますます早くなり、やがて行手に踏切がみえると、ショルダーバッグをしっかりおさえてかけ出した。と、その時、踏切の警笛が鳴り出した。

「おい、待てっ」

たまりかねて大声をあげ、あとを追う広大を、これまた全速力で追いかける男が現われた。制服制帽の警官、小宮新八郎である。